

## 中播磨新地域ビジョン検討委員会第3回観光交流部会 議事概要

(検討テーマ： 地域活性化と地域コミュニティの維持・再生)

### ■ゲストスピーカーからの話題提供

#### ○地域活性化と地域コミュニティの維持・再生～関係人口論を中心に～

##### 《説明要旨》

- ・ 関係人口とは、移住した「定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもない、地域と多様に関わる人々。関係人口をどう取り扱うかが重要
- ・ 「交流人口→関係人口」は可能性がある話であり、期待してもいいが、「関係人口→定住人口」は都合の良いレールであり、この発想が硬直化することは問題
- ・ 関係人口には、実際には様々なグラデーションがあり、定住化が必ずしもゴールではない（定住化をゴールにすると面倒くさい）
- ・ 一見さんではないファンを作るためには、魅力づくりやマーケティングが必然
- ・ 関係人口は、KPIのような量的アプローチで効果を計測することが難しい。
- ・ 関係人口を増やすことは目的（増やせば万々歳）ではなく、あくまで手段
- ・ 関係人口というカテゴライズは当人たちにとってはどうしてもよい話。人を選別する必要はなく、柔軟な対応が必要
- ・ 関係人口という言葉が最近使われ始めただけであり、やっていることは今までと変わっていない。しかしながら、この流れをうまくキャッチすることが大事
- ・ コロナ禍で現地を訪問できない時期に関係人口ができることは購買や資金的支援（クラウドファンディングやふるさと納税）だが、お金さえ落としてくれればそれで良いのか？そこに思いはあるのか？
- ・ 受け入れ側には他者を受け入れる寛容性が必要。受け入れ側が「関係人口など必要ない」と言えばそれまで。受け入れ側が「やりたい」と思うことがスタート
- ・ 協働・共生の前提には win-win の関係の構築と信頼（透明性・説明責任）が必要
- ・ 受け入れ側は、棚卸し的に自分たちの地域を見つめ直す（再整理）必要あり。

##### 《質疑等》

##### 〈委員〉

- ・ 「風の人」とはどういう意味か？

##### 〈ゲストスピーカー〉

- ・ 関係人口は、風のように来て風のように去るので「風の人」と言われる。「土」や「水」ではなく、移ろいやすく暫定的
- ・ しっかり根付く関係人口は血縁、地縁以外は考えにくい。それ以外には期待しすぎてはいけない。

### ■意見交換

#### ○関係人口の創出について

#### ○地域コミュニティへの受け入れについて

##### 〈委員〉

- ・ 神河町の山間部は限界集落が増え、維持していくのが難しくなっている。
- ・ 関係人口の議論は、地域性が大きく左右する。

- ・関係人口（集落を支える人）は、中播磨地域外の人に限らず、中播磨地域内（姫路の街中の人等）でもいい。

#### 〈委員〉

- ・その地域に興味をもってもらうための選択肢を増やすことが重要
- ・何かを体験してもら場合も、体験内容に軽重をつけたメニューづくりが必要
- ・北海道の石狩市では、関係人口づくりのために石狩市の農業との関係を構築する3段階のプログラム（ライト・ミドル・コアな関係）を提供している。

#### 〈委員〉

- ・田舎のムラ単位でもリーダーの力量によって差がある。リーダーをサポートする第三者機関が必要
- ・田舎の特徴として、もてなすことに努力しすぎる傾向が強く、休日も大忙しで疲れてしまう。このサービス精神だけを頼りに関係人口を構築することは、将来不安材料になる。
- ・受け入れ側も来訪者側も、もてなしを期待せずに対等な関係性をお互い示せる交流や、そのための手法が未だ熟成されていないことが問題

#### 〈ゲストスピーカー〉

- ・街中と街中の関係人口も、これからは十分あり得ると思うので、必ずしも過疎地域と都市との関係だけで捉えてしまうと、もったいない。
- ・学生は決しておもてなしをしてほしいわけではない。最初は嬉しく思うが、それが継続できるわけがない。できるところからスモールスタートでいい。
- ・学生はありのままの地域を見たいのであり、絵に描いたドラマのようなものを求めているわけではない。リアルな世界で、リアルな人たちがそこで何をしているかに興味があるのである。そのためには、中山間地域に行っても構わないと思っている人たちが一定数いる。
- ・地域側がおもてなしをしたい気持ちも分かるが、おもてなしに過大に労力を費やすとお互いの関係を歪めてしまう可能性もある。

#### 〈委員〉

- ・中播磨地域では、田舎の部分と姫路市を中心とした都市部は、神崎郡から姫路市内への通勤者が多いため、普段から交流ができています。
- ・神崎郡の農家と姫路市内の人は、農産物の販売やお裾分け等により、関係人口はでき上がっている。買ってもらうだけでなく、畑仕事を手伝ってもらうような手法をこれから田舎の人たちはもっと考えていかなければならない。
- ・畑の管理ができないのであれば、都市部の人に畑を貸して一緒に作業することも、これからもっと取り入れていくべき。ただ、農地、水田等の維持管理の費用をどうするかという問題だけが残るが、その辺はふるさと納税の方式などいろいろ考えられると思う。そういったものをうまくこの中播磨の中で組み合わせ、中播磨の都市部と周辺部の関係人口の厚さをどうやって上げていくかということが一番大事だと思う。そこから今度は域外へ繋げていく。
- ・田舎や都市部周辺はやはり外貨をどう稼ぐかということが地域を維持する上では非常に大きい。持ち出しやおもてなしをするのではなく、はっきりとお金をもらう。やはりビジネスライクでやっていかないと、お互いにやっていけない。

その代わりに、都市部の人や田舎の人が作った農産物を販売できる場所を提供する等の win-win な関係を中播磨の中でしっかり作っていくことが大事

#### 〈委員〉

- ・神河町では、一番山奥谷奥の集落で会員を募って稲作体験をやっている。これをもう少し発展させて、その地域のファンになってもらうことで、今度は田植えだけでなく、草刈りなど地域の困りごとへの助け船を買って出してくれるような関係に繋げていければと思う。
- ・都市の人と結びつくために、どのように情報発信をしていくか、どのように魅力を伝えるかが関係人口を作るための最初のキーポイントになる。中播磨内外にうまく情報発信をすることで、広がりを作れるのではないかなと思う。

#### 〈委員〉

- ・中播磨地域外の人にヒアリングし、情報収集しながら組み立てていくのもいいのではないかな。私自身、仕事の関係で30年くらい中播磨地域を離れていたが、改めて見るといろいろ新しい発見がある。他の地域と比べることによる魅力の見つけ方というのも仕組みとしてやってみてはどうかと思う。

#### 〈委員〉

- ・田舎では農業に軸足を置いた交流という話になるが、学生や若い人たちは農業だけに興味を持っているわけではない。
- ・最近、田舎の土日はサイクリングをしている人が非常に増えてきた。住民には分からない魅力を実際に来ている人に教えてもらうことが、今後、2050年を目指した中播磨を作っていく上で非常に大事なキーワードになるのではないかな。
- ・田舎でも女性や高齢者を中心に、畦道を散歩する人が増えてきた。健康志向のためかなと思うが、サイクリングや散歩といったものに軸足を置いて、田舎のあり方を捉えて考えると、もっともっと考え方が変わってくるのではないかな。

#### 〈ゲストスピーカー〉

- ・ビジネスとして成り立つかどうかはさておくとして、アイデアとしては良いと思う。要するに自分たちで考えているだけでは、その地域の魅力は発見できないので、目の付けどころが違う人たちが面白いと思うものは一体何かということを実際に聞いてみるのが重要
- ・やはり地域の受け入れ側への対価は必然。もちろんそれが高すぎるのはおかしい話だが、一方ですべて無償というのは、お互いにとってあまり良くない。
- ・大学人等からすると行政はすごくハードルが高い。行政のホームページを見る限り、行政視察は受け入れているが、それ以外の人（研究活動等）は何も相談する可能性がない。お互いにとってルーズ&ルーズの関係であり、我々のニーズも伝えることができない。
- ・例えば私の研究室の学生であれば、神河町の農業には興味がない。しかしながら、中山間地域でどのように人々が暮らしているかには興味があって、そういうツアーを組んでほしいと考えており、そのためにはもちろん対価を払う。そこで地域の方々と繋げていただくというのが、私は一つの方法としてはあるかなと思っていて、それは多分、観光の新しい切り口としてもあり得る。ニッチな人たちのニーズを把握した上で、やるべきことは何かを考えるべきではないかな。

### 〈事務局〉

- ・地域の活性化にあたり、空き家の活用についてはどのように考えるべきか。

### 〈委員〉

- ・空き家は地域の宝という捉え方をしている。今はそれをいかに拾い上げるかという作業をしているところである。
- ・特に最近では、町外の事業者が、県の補助等を使って、100年以上の古民家をコワーキングスペースやサテライトオフィスなど新しい働き方の場所として改修するケースや、一棟貸しのゲストハウスに改修するケースがある。
- ・駅の利用促進という観点からの空き家活用もある。空き家は消防法の関係で宿泊施設にするのはなかなか難しいが、駅を利用して来た人を対象に研修施設として使っているケースがある。空き家はいろんな形で使い道がある。

### 〈委員〉

- ・古民家を宿泊施設等として活用する取組は非常に有効だと思う。ただ、それをやるにあたっては、専門の業者と連携しながらやっていかないといけない。
- ・いずれにしろ、空き家を有効に活用して、そこに人が来て宿泊したりすることで、関係人口との濃度、密度、その場所を好きになってもらう度合いは高まるはずなので、積極的に進めていくべきだと思う。

### 〈委員〉

- ・空き家は放置されることが一番問題になる。利用価値のあるものは、これからもどんどん利用され、行政のサポートももっといろいろなチャンネルが出てくると思う。放置される住宅の方が今後、大きな問題になってくると思う。
- ・これからの若い人たちには、例えば週末だけ家島で過ごすといった住宅の活用がどんどん増えてくる傾向にあると感じる。
- ・空き家問題は田舎だけの問題ではなく、都市部ではもっと問題が大きくなると感じている。隣との密接の問題で放置された場合にどうするのかという点で、田舎よりももっと大きな問題になるので、田舎の方が利用しやすいだろう。

### 〈ゲストスピーカー〉

- ・価値があってストック活用できるものは放っておいても面白いことをする人たちがどんどん利用する。
- ・恐ろしいのは、中山間地域や都市部に大量に余る程度が悪い民家・空き家。個人的な意見としては、それらを壊すことの何が悪いのかと思う。2050年の社会がどうなっているか分からないが、価値がなく誰も使わないのであれば、むしろ発想を変えて、壊すことを一つのビジネスにすることも結構なことだと思う。空き家を壊すことでストレス発散したり、空き家でサバイバルゲームをしたりするビジネスが生まれれば、空き家の利用自体の意味合いが変わってくる。
- ・空き家の利活用が大前提になってしまうと話が進まない。中山間地域では集落ごと放棄されているところもあるので、そこで新たなビジネスを生むことを考えた方が、2050年にとっては生産的な議論かと思う。それがビジネスとして成立して、しかも地域にとってお金になればいい話である。
- ・要するに、経済的価値も利用価値もないような空き家が増えたときは、発想を変える必要があるのではないかと思う。

### 〈事務局〉

- ・集落と関係人口の関わり方として、農業や自然体験、散歩、サイクリング等が挙げられたが、これら以外にも関わり方のパターンはあるか。

### 〈ゲストスピーカー〉

- ・サイクリングはコロナ禍で注目されており、行政としてもサイクリングロードを作ったりしているのので、サイクリングスポットとして集落や地域を紹介することはwin-winだと思う。
- ・少し小さめでも構わないのでサイクルステーションもどきなものをモデル的に集落の中に整備してはどうか。普通は公共施設の中やドライブイン的なところに整備されるが、違うパターンがあってもいいのではないか。今までと違う場所性が、銀の馬車道など全体のストーリーとしては好ましいかもしれない。

### 〈委員〉

- ・関係人口を増やす上で、地域の受け入れ側の体制については、自治会のリーダーによって左右される。
- ・結局、自治会など地域における中間組織が緩やかにどれだけリーダーシップをとって取りまとめていけるかだと思う。
- ・今後、人口が減っていく中で地域コミュニティが担わないといけないものはたくさんある。行政から与えられている自治会の仕事は莫大な量で、2～3人の役員で全部請け負うことは無理である。スクラップ&ビルドしないといけない。
- ・地域においてSNSが全然活用されていない。自治会の中でどうやって情報共有をして物事を進めていくかという仕組みづくりも今後の大きな課題

### 〈ゲストスピーカー〉

- ・行政と住民の間にポジショニングするコーディネーター人材は、ある程度プロフェッショナルな人でないと担えるレベルではない。その仕事で食べていける（職業として成立する）プロフェッショナルな人を配置する必要がある。こうした中間組織をリスペクトし、投資をすることが社会にとって好ましい。
- ・地域における情報共有については、現状は全くデジタルの世界ではない。代替わりの難しさと担い手の問題もあるので、一朝一夕にデジタルな世界が進むとは思わないが、2050年を考えると、コーディネーター的役割の人か行政によって、情報の整備は進めていかざるを得ない。
- ・地域に任せる部分と地域ではもうできない部分は明確化されているので、その取捨選択を的確にする意味でも、コーディネーターがますます重要になる。

### 〈委員〉

- ・観光においても、地域資源の見直し等を行うには、外部やプロの視点は非常に重要である。都市部での活動経験のある外部人材に入ってもらうのが一番良い形であるが、そうした人を引っ張ってくるにはそれ相応の対価が必要となる。
- ・コーディネーターに対するお金の問題は、それぞれの地域に任せるのではなく、行政による仕組みづくりが必要だと思う。

### 〈委員〉

- ・行政、とくに町役場からの意見としては、マンパワー不足のため、役場の職員が地域のコーディネートを行うことは難しい。特に山間部の行政組織において

は顕著であるため、県との連携によりスクラムを組むしかないかと思う。

- ・中播磨地域における関係人口の創出に向けて、人と人とのつながりを作るのに、新たなシステムを作るのもいいが、ひょうごe-県民制度がうまく動いているのであれば、活用できないかと思っている。

#### 〈委員〉

- ・団体そのものを変えたり無くしたりというのはなかなか難しいが、既存の団体の運営方法を変えていくことは行政側にも出来る範囲のことではないか。運営の形だけ変えていけば、ある程度のことには対応できるのではないかと思う。

#### 〈ゲストスピーカー〉

- ・いろんな物事は最終的には人材をどうやって育てるかということに行き着く。地域で担い手を育てていくことの必要性を理解した上で、プロフェッショナルな人材のもとで修行するような「育てる我慢」も必要ではないか。全部が外に流れてしまうと、その地域に何も残らないので、うまくプロフェッショナル人材のところへ地域の人たちが入っていくことで、「人」を残すということが最終的には重要である。当たり前の話であるが、最後は「人」だと思う。

(以上)